2014 年支援活動

①東北訪問「被災者・避難者の証言」

３１１　有志
齋　藤

はじめにー2014 年の毎月の活動記録をひとつのデータに編集しましたが、長すぎ、重過ぎ、ＨＰに掲載することは割愛し、目次程度としました。
その代わり、最も、首都圏はじめ多くの方々に知って頂きたい「被災者・避難者の証言」を、「活動記録」より抜粋・補筆しました。

３・１１から４年目に入るのに「復旧・復興」はごく一部。心身ともに苦悩が増している現実は悪化。東北の仮設住宅だけでなく、巻末には首都圏へ避難されている方々の話や、「原発被害―放射線量測定」についても、触れました。

あの原発稼動ゼロでの節電もどこへやら、煌々と灯りに沸き立つ都会。出来る範囲での支援を！

≪　１月　岩手「じぇじぇじぇ！」体感ツアー≫

２８日（火）池袋駅→八戸駅

２９日（水）八戸駅→久慈駅→北山崎観光→田野畑村宿泊

３０日（木）田野畑村→宮古市→大槌町→釜石市→陸前高田→一ノ関→池袋

証言①―１月29日（水）岩手県田野畑村《「津波語り部」ガイド》

午後３時。名勝地「北山崎」観光のあと、乗合タクシーで、ホテル「羅賀荘」へチェックイン。荷物を置き、今回のツアー目玉企画へ。６人～９人の場合、１人１５００円。

震災前、震災後の村の変容や、ホテルに津波があたった瞬間などの写真を見せながら、地元の元漁師さんから、３．１１当日の話を写真を見、現場を歩きながら、傾聴する。

この田野畑村「羅賀地区」では、１７０戸中、全壊、大規模崩壊が１０８戸。死者・行方不明者７人。「証言」は個人の体験談だけに、生々しく、当日の怖さも伝わってくる。

まず、地震から暫くして、これまでに見たことにない引き潮にビックリ。沖の小島までが、砂浜が白く露出。が、第１波の津波はそれほどでもなく、「まあ、こんなもんだろうな。」。

その後の第２波の津波は、３０メートルはあろうかという波が立ち上がり、ホテル「羅賀荘」の３階までを完全に打ち抜いた。

そして、「語り部」は、高台の最も上の「本家」へ避難していたが、写真右から左へ一気に高台から下へ流れ落ち、道路の上にあった集落の半分を飲み込んだのを見て、仰天。さらに裏山の神社へ逃げた。すると、これまでに聞いたことのない「バリバリ」という大轟音とともに、引き潮が始まった、という。

そもそも、昭和８年の津波で、海岸そばにあった集落が壊滅したのを機に、高台に集団移転したので、「安心感」があった。そのため、海に近い道路端の家では、第１波の津波をガードレールから眺めていた。しかし、第２波の巨大な波に驚き、家族で逃げようとしたが、３世帯一家７人のうち、１歳の孫を抱いた祖父が高台にあった防災センターあたりで発見され、奇跡的に瓦礫の中の孫ともども助かったが、残る５人が亡くなった。また、その隣家でも、車で足の悪い祖母を高台に避難させ、家に戻ったところを夫婦とも流され、亡くなった、という。

そして、なんと、高台にあった、「明治２９年の大津波で死者９８人の慰霊碑」も流され、欠けて発見された。寒さに震えながらも、大変有意義な時間だった。

証言②―1 月 29 日（水）田野畑村≪ホテル従業員体験談≫

午後６時。事前にホテルにお願いしていた企画。

ホテルのベテラン従業員「ミウラ」さんに、涙ながらの「３．１１当日」を説明頂いた。

ミウラさんの話。

「地震発生とともに支配人の的確な指示で、これまでの防災訓練通り、４０人の宿泊客は、車で高台へ避難誘導、残る従業員は、５階の「大広間」へ避難しました。

すると、巨大な波が正面からホテルを直撃し、その瞬間、３基のエレベーターを伝って、ものすごい風圧と音がしました。それぞれが身近な机などにしがみついて、身体ごと持っていかれるのを防ぎました。そして、孫越しに、屋上を越えていく波が見え、あちらこちらで悲鳴や泣き声がしました。その時、私は、「どうせ一度は死ぬんだ。泣くんじゃないよ。」「みんなで挨拶しよう、声掛け会おう」などと周りの女性従業員たちを励ましていました。

その後、ボランティア、警察、消防、自衛隊、そしてお坊さんなどが、本当に寒い中、朝から晩まで黙々と瓦礫撤去や遺体捜索、保管、祈祷などをしてくれたのを見て、大変有り難かったです。

以来、「ともかく生きていさえすれば」と

元気、笑顔で日々、こうして遠方からお越し頂くお客様に感謝の気持ちを表すことに専念しているので、「明るく、笑顔で」接客。「観光」で見える一般のお客様には悲しい、辛い気持ちは、悟られないようにしています。それでも、時に、ソレで良いか、自問自答し、今日のような（支援の）皆様に、本当の気持ちを隠さず話せて、本当に良かったです。」

ちなみに、「ミウラ」さん自身のご家族は無事だったが、叔父さん夫妻を亡くした。また、３．１１後の５月の豪雨で土石連れとなり、今は「仮設暮らし」。ただし、３．１１の被災者と同じ支援は受けられないので、経済的にきつい、とのこと。

なお、ホテル従業員６０人の約半数が家を流され、仮設暮らし、という。

≪津波被災したホテル≫

以下記事にあるように、この建物は、「震災遺構」でもある。その被害は、甚大で、再開も危ぶまれたが、震災から１年半かかってようやく再開。このホテルを３０m級の津波が直撃、３階までのフロアを打ち抜き、そのしぶきは屋上を超え、裏山にまで達した。しかし、①岩盤をくりぬいて基礎や支柱を作った②「万一」のため、津波を跳ね返すのでなく、打ち抜かせる「柔構造」で設計されていたことで、建物の躯体は無事残った、とのこと。多くの企業や市民の支援により再開、解雇されていた６０名以上の従業員の再雇用が果たされ、また田野畑村の市長が社長を務める第３セクターは、村の財政再建の柱、と力を入れている。

【写真＝被災後のホテル羅賀荘】

住所: 〒028-8403 岩手県下閉伊郡田野畑村羅賀60−1 **電話:**0194-33-2611

田野畑・羅賀荘改修し 11 月再開へ　客室は４階以上に

岩手日報　2012/03/13

田野畑村羅賀海辺にそびえ、昨年３月１１日の津波で地上１０階建ての３階以下が激しく損壊した田野畑村のホテル羅賀荘が、１１月の営業再開を目指して現地で復旧される。

運営する第三セクター・陸中たのはた（社長・上机莞治村長）は施設を大規模改修し最大３４４人収容できる客室を６８室設ける方針で、観光復興の足掛かりと位置付ける。

震災時に解雇したパートを含む従業員の再雇用を中心に、住民６５人程度の雇用を確保する。３階までのがれき撤去は既に完了しており、４月下旬に着工、１０月の完成を目指す。

津波浸水した客室フロアの３階は、宿泊客の安全を確保するため個室宴会場などに改修予定。４階以上を客室にする。津波で従業員と約４０人の利用客に犠牲者は出なかった。再開に当たっては高台移転も検討されたが、多額の費用がかかる上、時期が大幅に遅れることなどから断念したという。

証言③―1 月 30 日（木）大槌町《「町役場」跡での談》

午後１時前、大槌町に入る。見渡す限り、何も建物がない中心部にある「町役場」へ。町長始め、４０人の職員が亡くなった場所。一部保存が決定している。正面で合掌した人のジャンパーに「商工会」の文字。早速、声をかけると、ここでも、親切に色々教えてくれ、持っていた写真で、以前の賑わいのあった街も見せてくれる。同級生６人が亡くなった、という。当人も３・１１当日、数日前に生まれた子供の出生届け出しに行った「町役場」に行き、タッチの差で助かった。
その後直後、町長はじめ多くの方が犠牲者になり、出生届も戸籍台帳も津波に流されたが、その後、３月１１日に受理した、と再登録が出来たので、ホッとした、とのこと。

●大槌町―2011 年３月 11 日の地震、大津波と発生した火災により、町は壊滅的被害を受けた。１万５千人の町で、死者・行方不明者１７００人。
震災時、町長・加藤宏暉を始めとする町職員幹部ら約 60 人は災害対策本部を立ち上げるべく町庁舎２階の総務課に参集したが、約 20 人が屋上に上がったところで津波が到達。町長と数十人の職員は間に合わず、庁舎の 1、2 階を襲った津波に呑み込まれて、そのまま消息が途絶える。町長以外にも課長クラスの職員が全員行方不明となったため、行政機能が麻痺した。県都である盛岡市から車で数時間かかる地勢も災いして、被害の全容が外部に伝わりにくく、周囲から孤立したような状況がしばらく続いた。
津波で民宿の屋上に漂着した釜石市の観光船「はまゆり」は、防災教育を主目的とした震災のモニュメントとして保存する案が浮上していたが、釜石市は「町の復旧に支障が出る」として解体。
現在、町内の防災行政無線のお昼のチャイムは、同町にある蓬莱島がモデルとなった「ひょっこりひょうたん島」のテーマソングが使われている。

≪　３月　石巻市民交響楽団特別演奏会参加≫

２９日（土）石巻「前日練習」→石巻市内宿泊
３０日（日）「東日本大震災犠牲者追悼コンサート」
３１日（月）福島県被災地ツアー（新地町、相馬、南相馬、富岡）

≪５月　福島「朗読・話芸」浪江・南相馬仮設住宅訪問≫

２４日（土）第２６回「安達運動場仮設住宅」
　　第２７回「郭内公園仮設住宅」
２５日（日）第２８回「寺内塚合第２仮設住宅

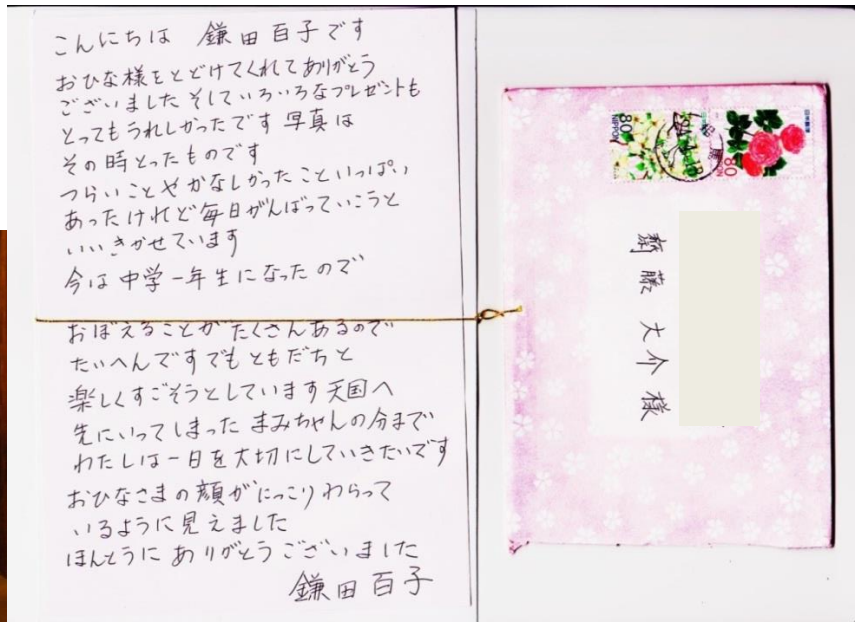
証言④―５月２４日（土）相馬市《レストラン　シェフの話》

７時半からディナー。１時間半かかって、阿武隈山系を山越えし、浜通り「相馬」の常連「百子ちゃんの」レストラン「pomme de terre」へ。貝柱とイカの、スペシャルメニュー。優しい味。ご飯は魚沼産。（３０㎏２８０００円と聞いて、全員、残さず食べる）。

いつもより、長時間、鎌田シェフが、「放射能汚染」や「支援者への注文」など「演説」。前回訪問した際の首都圏支援メンバーたちが、イベントも終わり、ホッとしたのか、楽しげに笑い転げていたのを見て、「何をしに来ているんだ」と、つい、怒りを覚え、話したかった内容も半分も話さずだった、と。そして、「美味しんぼは良く取り上げてくれた。私自身、鼻血が３．１１以前は無縁だったのに、出るようになり、娘も、同様で、被爆したせい、と思っている。みんな自分が被爆者ということを隠し、病院にも行かず、言わないだけ。」と言われたことは、やはり、ショックだった。
一同、厳しい現実を突き付けられ、重苦しい中、参加者の元小学校教師の方の「私は、ただ日頃練習してきた朗読をただ、どなたかの前で披露したかっただけなんで、支援などおこがましい」など正直な感想でほぼ終息。苦言ばかり、だったシェフも、帰りには満面の笑みで、「頂きものだけど」とＴシャツやドイツビールなど頂いてしまう。手土産に、と用意した土産の酒、自宅に置き忘れ。残念！９時半、相馬ステーションホテルチェックイン。そして、シェフから「格安」で分けて頂いたハウスワインなどで、乾杯！１２時就寝。

●相馬市―福島県の浜通り北部に位置する都市である。戦国時代後期から江戸時代にかけて相馬氏の本拠地であり、特に江戸時代には中村藩６万石の城下町として栄えた。
被災前人口３万８千人。３・１１での直接死・行方不明者と、その後の関連死を加えると、500人近くが犠牲になった。阿武隈高地を越えた福島市や、夜ノ森を越えたいわきよりも、駒ヶ嶺を越えた仙台の方が移動に便利であり、常磐線で１時間程度で行ける。新地町と共に「仙台大都市圏」に含まれており、仙台市のベッドタウンと見る事もできる。又、宮城県の相馬野馬追が有名であり、市街地には馬の銅像が点在する。

●レストラン「pomme de terre（ポム・ド・テール）―ＮＨＫのドキュメントシリーズ番組「２１人の輪」で、取り上げられた相馬市の磯部小学校児童の中で登場、家を津波に流された「モモコ（百子）ちゃん」の両親鎌田さんの店、「ポム・ド・テール」で、名物の「煮込みハンバーグ」を頂きながら、ご両親より、被災から今日までの様々な苦労話を聞くこと、数回。道路の対面側の市街地は、津波被害で人が住んでおらず、走る車は、この店目当てのみ。２０１２年２月、都内の支援者から寄贈された１組の雛人形を、福島のボランティア「美歌」さん経由でプレゼント。そのあとのお礼状。「まみちゃんの分まで」とあるのは、３．１１直後に下校時に別れたのが最後となった、津波で亡くなった親友のこと。


こんにちは　鎌田百子です
おひな様をとどけてくれてありがとう
ございました そしていろいろなプレゼントも
とってもうれしかったです 写真は
その時とったものです
つらいことやかなしかったこといっぱい
あったけれど毎日がんばっていこうと
いいきかせています
今は中学一年生になったので
おぼえることがたくさんあるので
たいへんですでもともだちと
楽しくすごそうとしています天国へ
先にいってしまったまみちゃんの分まで
わたしは一日を大切にしていきたいです
おひなさまの顔がにっこりわらって
いるように見えました
ほんとうにありがとうございました
鎌田百子
藤藤大介様

相馬市程田薮内前３１０　　TEL0244-35-1717　　携帯０９０―２６０４―８４３３

なお、相馬市の南に隣接した合併市「南相馬市」。今回の「証言」では掲載しませんでしたが、2014年の仮設巡りでも、同地区の避難者の方々と交流し、2012年４月末、立ち入り解除から２週間後、それまで手付かずだった津波による瓦礫や土砂、家の片付けなどの作業に対し、急遽呼びかけあり、首都圏から９名で終日汗を流したところ。原発や津波の被害地域として、避けて通れない地域なので、紹介します。

南相馬市―数年前までは、「原町地区」「小高町」「鹿島町」などと呼ばれていたところ。ほぼそのまま「区」を名乗る。東日本大震災では、700人近い方々が犠牲になった。また、震災での原発爆発からの避難で、７万から１万まで人口激減、昨年４月からの「警戒区域２０㎞圏内立ち入り解除」などもあり、ようやく半分強の５万人近くまで戻ったが、漁業、観光ともまだ復興には道遠し。国の重要無形民俗文化財に指定されている相馬野馬追が行われる。北泉海岸はサーフィンでも知られており、夏になると世界大会が開催された。関東大震災を最初に世界に伝えた原町区の原町無線塔は、高さ約200mで、当時アジアで最も高い建築物であった。しかし、老1982年（昭和57年）に解体、現在は1/10スケールの記念塔である憶・原町無線塔がある。

朝日新聞　2013年(平成25年)4月18日　木曜日

避難先に基盤 戻れない

南相馬・小高区「立ち入り可」1年

東京電力福島第一原発事故に伴う避難指示区域が福島県南相馬市で再編されてから1年たった。立ち入りできる地域は広がったが、避難先の生活から離れられない被災者は多く、元のコミュニティーが戻るのは難しくなりつつある。

バレーボールのチームメートに囲まれ、笑顔の吉田希乃さんら（右から2番目）＝1月、仙台市

南相馬市から約220キロ離れた千葉県鴨川市の小学校体育館。近くの同県鋸南町に避難する吉田希乃さん（9）、ひまりちゃん（7）姉妹は6日、地元の子どもに交じってバレーボールを追っていた。練習を終えると、チームメートとケラケラ笑い合った。

2人は昨年、地元のチームに入った。母の一美さん（39）は「新潟、埼玉と避難したが、仕事が一時、見つからなくなった。市役所からやっていたバレーボールをここで知めたら、なくなった」と振り返る。

「子どもに負担」帰還した児童27%

夫の仕事で移住

一美さん一家4人は昨秋前、南相馬市小高区に住んでいた。同市の隣の福島県浪江町にあった夫の勤務先が原発事故で千葉県内に移ったため、一昨年の夏から成田市で暮らす。姉妹も市内の小学校へ通う。

放射線の不安もあるが、避難を続ける大きな理由は、「ふるさとの仲間にはずれてしまったから」だ。「子どもたちが笑っていられるように学校へ通うのが一番」。夫の勤務先が浪江町に戻ってもお面、帰る気はない。「もう疲れた」一美さん自身にも、出産など生活情報を得られる親同士のつきあいができた。

小高区で食堂を経営していた横部明さん46は家族3人で山梨県甲斐市に避難し、新たな職も得た。被災した食堂は片付けた。「食堂を再開したい、が、安定している今を問されて戻っても、家族を捨てない」

再開事業所1割

南相馬市は避難指示区域となった山市町村で最も人口が多い。昨年4月に他の2市村とともに再編のトップを切った。区域から20キロ圏内の警戒区域だった小高区は、放射線量に応じて三つの区域に再編された。ほとんどの地域が、宿泊できないものの立ち入りは自由な避難指示解除準備区域と居住制限区域になった。先に帰宅が認められた小高区民も、区役所や信用金庫の支店、小学校や郵便局は再開。だが、震災前にあった約1000の事業所のうち、再開したのは建設業を中心に約10事業所。「ゴーストタウンだ」。いまは区外の仮設商店で営業を続ける4小学校の児童数は、震災前の3分の1。帰宅者が戻ってきても、子どもたちは、バレーボールチームのメンバーは数人になった。

市全体では、この1年間で避難していた3千人余りが市内に戻った。新たに転入した人を含め、約4万500人の市民が市内で暮らすようになった。だが、事故前の約7万1千人には遠い。一美さんは「故郷に戻りたいのは当たり前。でも、戻っても地元はバラバラ。子どもたちに、もう負担をかけたくない」と話す。

（佐々木達也）

≪　６月　福島「合唱伴奏」浪江町仮設住宅訪問≫

７日（土）第２９回「旧平石小学校仮設住宅」
　　第３０回「大平農村仮設住宅」
８日（日）第３１回「恵向仮設住宅」
　　第３２回「高木仮設住宅」

⑤―６月８日（日）本宮市《浪江町「高木仮設住宅」での証言》

イベントが終わって、集合写真。その後、５人の男性が残り、主に３人の方が語った。そして、帰り際、彼らからは、「普段は誰にも言えないことを今日のように話せて、気持ちが楽になった。ぜひ、首都圏の方々へ現在も苦しんでいる我々の実態や、放射能汚染が止まらず、野田の「終息宣言」、安倍の「コントロール」などウソ偽り、帰還促進の国は、ただ賠償を少なく、そして再稼働しがっているだけ。事実を伝えて欲しい。」と託されました。

自治会長

「当初は 60 世帯いたのが今は 40 世帯ほど。子育て出来る環境に無く、中学生以下、若い人や除染などの作業の仕事にありつけた人が出て行った。なので、いま、残っているので、一番若いのは高校三年生。私たちは皆、様々な不安に心が乱され続け、安心な気持ちになれない。その最大の原因は、今も終息どころか、ただ冷やし続けるしかなく、放射能汚染が拡大し続けている、という事実だ。それと、町を３分割に勝手に分けても、では帰宅が近い将来可能、というわずかな地域の住民も、いくら除染しても、また山からの樹木と枯葉の循環で、下の平地も汚染がぶりかえし、しかも、一度やった除染場所は、２度目はやらない、というのでは、いたるところにホットスポットがあり、危なくて帰れない。私自身が除染作業に従事していたのだから、この無駄な金のかけ方は、我々のためにやっているのではないと実感していた。それに、どこで買い物するんだ、誰が買いにくるんだ、と帰還が始まったほかの地域でも、ごく一部の高齢者以外は帰らない事実があるではないか。賠償金月 10 万で食費・光熱費・電話代・車代など賄えない。仮設暮らしがいったい、復興住宅へいつ移れるか、全く見えず、３世帯で仲良く大きな家で母屋、離れ、一階、二階などの部屋で棲み分け、揉めても、自分の部屋に戻って、翌日には笑顔で食卓を囲んでいた家族も、いまは、狭い仮設で離ればなれになり、また狭い部屋で、親子、夫婦、兄弟などの間でもケンカが絶えず、平安な日が無くなった。

そして、４月に会長になったばかりで、ほんの数日前、孤独死を出しちまった。一人暮らしで引きこもり。脳溢血で風呂場で倒れてた。
こちらも、このようなイベントや医療関係者が来て、健康診断をしてくれる、という機会に、ひとり暮らしの方に声をかけるようにしているが、鍵も開けず、声だけで、分かりました、Ｐ８といったきり、やはり出てこない方々がいて、心配だった矢先の死亡。そこで、土日は、気楽に我が家に誰でも来てくれるようカレーを作っているんだが、引きこもりの人は声をかけても、返事だけで、出てこない。なので、さきほどの昼食も、皆さんのために特別作っておいたんではないんだけど、余ったので、ちょうど良かった。」。『ダッシュ村』の三瓶明雄さんが亡くなったが、属する上組のメンバーが全国に散って、葬儀の手伝いが人手足らずなので、自分が組長だった下組 12 戸連絡がみんなで手伝うんだ」

前原発作業員

「私は、３・１１の地震を、３号機の地下で体験した。すごい揺れで、実は、誰にも言えないでいたが、津波の前に、すでに地下へ通じるシャッター2 枚は壊れ、放射能が通常値ではありえない 900 マイクロの高レベルが検知され、内部も５００あったが、鉛で遮蔽されている場所へ行くにも、その汚染場所をまたいで行かなければならず、そこで被爆した。」
「翌日には、避難命令もあり、仲間 5 名と、絶対に原発作業員だ、とか、被爆したことを他には漏らさず、秘密だ、ということを誓い合った。でないと、ほかの一般住民から何を言われるか分からない、緊迫した空気だったからだ。しかし、すぐにバレてしまった。避難場所に行くと、スクリーニングで身体検査された。ほかの住民たちはどんどんパスしたのに、自分の番になって、足元へ検知器があてられたとたん、検査官が、なんだ、これは！と奇声を発し、どこにいたんだ、と詰問されたので、仕方なく、原発作業員です、と告白しちまった。一番、汚染されたのが、靴下だったのだ。その後、人手不足から、また作業復帰の呼び出しがあって、完全防護で行き始めたが、まず、その恰好になるだけで汗がどっと出てきて、顔の前の窓は、すぐに曇ってしまう。なので、本来は、遠回りして現場に入るところも、そんな悠長な事など出来ないので、高レベルの汚染スポットがあっても、一番近いルートで通るほかなく、3 時間以内、５０マイクロの制限、などと言っても、カウンターはすぐに高レベルで警告音を発し、確実に被爆している感じ。」
「３・１１前に放射線の危険について、事前教育をそれなりに受けていた我々は、いかにそれと異なる、危ない基準値で作業させられているか、を知っている。３・１１前は、各地域が危険度で区分けされ、Ａ（全く安全）～Ｄ（即死）ゾーン、その中で、いわゆる「管理区域」と言われる、Ｂ－２からは、簡易的な防護服着用。確か、０．２、年間１ミリシーベルト、程度だった。そかし、今は、そんな基準はとっぱらわれ、福島だけでなく、栃木や宮城などでの汚染地域も含め、一般市民は、平服で普通に生活している、と言う状態。金に命は代えられないので、この仕事を辞めることにし、ようやく、このように話すことも出来るようになった。一方では、被爆を知りつつ、作業している人もいるし、何も教育を受けず、ただ、全国から集められた素人が多くなって、かれらの被爆も心配だ。」

義理の兄弟が原発警備・消防要員

「自分の妻の兄弟が、第１原発の警備と消防の組織に長く勤務していて、３・１１以前の放射能対策を考えると、今の対策は、対策になっていない、という。」（「前原発作業員」の発言にそのつど、同調。）「家族は兄弟の関係で千葉にいるが、仕事がこちらなので、高速使って週末に行く。なんで、こんな生活を続けなきゃ、と思う。でも、首都圏に行くと、もうネオンも電気もつけっぱなし。何もなかったよう。風評被害、というけど、福島県だけが汚染されているんではない。周りの県や、千葉など首都圏などでも相当汚染され、いまだに汚染は残り、またさらに増えているはず。また、特に４号機の 1500 本の使用済み核燃料の対応次第では、関東一円からも避難しなければならない事態も想定され、他人事ではないはずなのに、もう忘れている感じ。」

2012 年から 2014 年の３年間で、最も多い 10 箇所の浪江町の方々の仮設住宅を訪問しましたので、最も馴染みの出来た地区、と言えます。また、原発被害で、現在は町が３つの帰還可能性の区分で分けられ、町民避難地域は、日本全国に及び、福島県内には、７割弱の約 1.5 万人が、広い福島県内の５２市町村に分散しています。

●浪江町―震災前人口約２１，０００人。太平洋岸から山合にかけて細長い区域。北に南相馬市、南に双葉町。山合いには、日本テレビ「鉄腕ＤＡＳＨ村」があったところ。名産品は、国の伝統工芸品「大堀相馬焼」や、「Ｂ級グルメ」で「浪江焼きそば」。

３月１１日、大震災。津波（約１６m）による死者・行方不明者は、184 人。一方、隣の大熊町で起こった第１原発災害で１４日午前、半径１０㎞圏内の全域（請戸地区など）、午後には、半径２０㎞以内の浪江町東部全域に避難指示。二本松市東和地区に町役場も避難、翌１５日以降、８０００人が移動、避難した。さらに、４月１１日には、半径３０㎞圏内の西部地区の大部分は、「計画的避難区域」に指定され、震災から１ヶ月以上経過した４月１４日より、福島県警による「行方不明者捜索」が始まり、４月２２日、半径２０㎞圏内が「警戒区域」に指定、住民が立ち入りが出来ないこととなった。沿岸部や一部中心部などを除く山間部などは、高線量汚染により、帰宅困難地域に指定され、町全体の復旧・復興は望めないまま、約７割の1.5 万人は福島県内各地（福島市約 3500 人、いわき市 2600 人、二本松市 2300 人、郡山市 1700 人、南相馬市 1200 人、そして本宮市 700 人など各地）。残る６千人は、和歌山県を除く４６都道府県（茨城県約 950 人、東京都約 900 人、埼玉県約 750 人、宮城県約 650 人、千葉県約 550 人、新潟県約 500 人、神奈川県約 450 人、栃木県約 450 人など）へ分散避難中。

【浪江町棚塩地区―遠方に第１原発。】　【浪江・小高原発の元建設予定地】

≪６月　石巻・女川「廃校校歌」ファミリーコンサート≫

２１日（土）石巻市立「開北小学校」コンサート
２２日（月）石巻市立「女川小学校」コンサート
２３日（火）栃木県日光市、震災作家「たくき」氏自宅
２４日（水）栃木県鹿沼市内観光

≪７月　福島「合唱伴奏」楢葉町仮設住宅訪問≫

１９日（土）第３３回「上荒川仮設住宅」
　　第３４回「高久第８仮設住宅」
20日（日）第３５回「高久第１０仮設住宅」
　　いわき薄磯地区・北茨城市
　　「高久第１０仮設自治会長の話」

証言⑥―７月２０日（日）いわき市《楢葉町「高久第１０仮設自治会長」の話》

１　楢葉町の帰還

今年１月復興庁集計の住民アンケートでは、すぐに戻りたい８．０％、条件が合えば戻りたい３２．２％、戻らない２４。２％今はまだ判断できない２４．２％。どんどん「戻らない」人が増え、すぐに戻りたい人は少なくなってきています。

≪参考≫

―２０１１年８月楢葉町調査
戻りたい６９．７％　戻らない５．６％　分からない２２．７％すぐ戻りたい１０．０％
―２０１３年２月復興庁調査
すぐ戻りたい９．７％条件が合えば戻りたい３３．１％戻らない２２。３％
今は判断できない３４．０％

一応国は、線量が低くなり、除染も進んだ、として、帰還が近く可能、との方向ですが、町は、「来年春に（帰還問題を）判断する」として、棚上げし、悩んでいます。
何故、戻らない人が増え、すぐに戻りたい人が減るか、それは、環境庁や東電の情報が全く信用ならないからです。モニタリングポストの毎日の放射線量の発表はあります。しかし、その測定器の廻りは除染し、そこで測った数値などは、日頃の身の回りの汚染とはかけ離れているというのが、実感で、除染に関して、全然進んでいません。それは、ずさんな除染作業の実態を私たちは見ているからです。例えば、汚染物を川に捨てたり、水で洗い流しただけで、その放射性物質はそのまま下水に沈殿している。除染はパフォーマンスとしか思えない。そもそも３．１１前の通常の生活で容認されているリスクレベルの空間線量は、毎時０．０３マイクロシーベルト、年間１ミリシーベルトの値であったのが、暫定的に２０ミリシーベルトに変更されるなど政府の言葉を信用できない町民が増えてきたということです。また、除染で出てくる汚染物の「中間貯蔵施設」の候補地もまだ決まらず、第一原発の原子炉建屋への地下水流入を防ぐ措置として凍土遮水壁を作るなどと言っても、そもそも炉心溶融で地熱が暖かくなって、凍らない状態で（7 月 23 日付報道でも予定を 1 か月過ぎても凍結に成功していないと判明）汚染水の海への流出等不安材料が一杯でこれも町民たちが戻れない、という気持ちになる原因です。例えば、今でも、線量計で測ると、いわき市内は概ね０．２３以下、つまり年間１ミリシーベルト以下にはなっているところが多いのですが、北上して、楢葉町では、まだ０．５以上、そして第２原発も実は３．１１の地震被害であと一歩で、というところまでのところで、メルトダウン寸前、で、私も町の復興対策委員なので、先に行われた燃料棒を取りだし、プールへ移す作業を見てきたが、まだまだ２号機だって分りません。隣の富岡町では、概ね１．０前後が、第１原発の大熊町、双葉町では１０～５０などと上がり、また南相馬に入って、低下します。こんな状態なので、若い人たちは戻りたくない、ということになり、戻りたいのは、先の無い高齢者ばかりです。では、帰還したい、と思っても、津波で流された家は無く、一部は、地震被害で壊れ、また多くは、３．１１以前と外見上同じ家だったのに「緊急避難」のまま、立ち入れず、放置してきたため、痛みがひどくなり、以前の調査では、２７００前後の世帯数で、７００戸ぐらいが全壊、半壊などで取り壊す対象、とされていたのが、今では、畳からキノコが生え、ネズミに荒らされ、雨漏りもしたりで１０００戸が対象となってきました。どんどん、家が傷んできています。しかも、それまでは、一戸建てに孫まで３世帯で暮らしていたのに、戻っても、高齢者夫婦だけで暮らす、というのは、買い物や健康問題など不安だらけで、今、解体すれば、自己負担はないのですが、想い出の詰まった家で、まだ新築したばかりの家もあり、壊すのは忍びない、という迷いがあります。しかし、帰還への環境整備が出来ていないというこの状況を行政、国、東電はまともに受け止めず、または情報をコントロールし、都合の悪いことは表に出さない、というだけでなく、現場からの上へのいくつもの組織の段階で消され、上にも届かないのです。一応、賠償金は、毎月慰謝料が、ひとり１０万円と（避難指示解除準備区域新築での時価相当額の三分の一を６年間は保証、ほかには財物の補償がある）と、新築での時価相当額の３分の１の金額６年間は保証と一方的に通知され、すでに２年分は受け取り、あと４年間分ですが、これも問題あり、です。Ｐ１２

２　３．１１後の避難

私は、デイサービスの施設経営をしていました。その日、３３人の高齢者をお預かりしていたのですが、自宅に戻れない方が、１７人いました。それは、津波で自宅が流されたり、ご家族と連絡がつかず、迎えが来ない、といった方々です。そして、夕方６時頃、知り合いの東電関係者から、「第１原発でメルトダウンが始まっていて、いつ爆発するか分からない。」「第２も分からない」という情報が入り、慌てて、バスや車を手配し、まずはいわき市内の市立第６小学校に避難しました。その晩は、身体の不自由な方たちにも、冷たい床で寝て辛い想いをさせました。そして、翌日は、いわき市内の高齢者施設で１日だけ、受け入れしてもらったのですが、先の東電の「もっと遠くへ逃げろ」という情報です。茨城県の高齢者施設から受け入れを承諾頂いたので、またバスと車で向かうと、もうすぐ施設、という時になって、「全員、（放射能汚染の）スクリーニング（除去）をしていなければ、受け入れ出来ない。」と電話が入り、仕方なく、再度、受け入れ先を探したところ、千葉県の施設で、「スクリーニングなどは良い、すぐ来なさい。」と快諾してくれたところがあったので、それから３ヶ月、滞在することになりました。最後には、山の上それぞれ家族と連絡がついて、迎えに来てもらった人を除き、自分たち以外は、親戚の一人が残っていました。７月になって、この仮設が出来た、というので、引っ越してきました。

これまでの訪問先で最も首都圏から近い「いわき市」。海もあれば山もあり、また、かつては炭鉱、「常磐ハワイアンセンター」（現スパリゾート）でのフラダンスも有名です。

●いわき市―福島県 200 万の中で、郡山市、福島市と並ぶ、浜通り最大の 34 万都市は、３・１１では津波被害に加え、地震被害も大きく、全半壊は４万戸、死者約 400 人に及んだ。原発事故での一時避難で、約半数の 15 万人が県内外に避難し、実質の人口減少は１万人近くに対し、現在では、避難中の「浜通り」の各地の市民の、最も故郷に近い避難場所として、多くの仮設住宅に加え、自宅購入や原発作業員たちの宿地として、３万人近くの人口流入が続き、地価も上昇、賃貸アパートなんどの空家待ちや、交通渋滞や病院も混雑し、いわき市民税も払っておらず、これまでのいわき市民との軋轢も一部で出ている。

そして、この証言の「楢葉町」は、現在、全町民 7500 人が避難を強いられているが、元々、線量が比較的低く、除染も進んだ、として、帰還が検討されている。まさに原発の町。ウイキペディアでも、こんなに短い説明。

●楢葉町（ならはまち）―福島県浜通りにある町。双葉郡に属する。東京電力福島第二原子力発電所の１号機 －４号機が立地する。2011 年３月 11 日の福島第一原子力発電所事故の影響により、町の仮役場をいわき市にあるいわき市立中央台南小学校内に設置していたが、会津美里町に一時移転した後、現在はいわき市にあるいわき明星大学内に設置している。なお、前記のいわき市立中央台南小学校にも対策本部は存置されている。

《日経新聞５月29日》

福島・楢葉町、住民の帰還が来春以降に　町役場は来月に再開

東京電力福島第１原子力発電所事故で全住民が避難している福島県楢葉町は29日、2015年春の帰還を目指すと発表した。６月には元の役場で一部業務を再開し、新たな専門組織も設けて帰還の準備を加速する。ただ、松本幸英町長は条件が整わなければ延期する可能性があることも強調。町内の生活環境の一層の回復と充実が帰還実現のカギとなりそうだ。「熟慮を重ねた結果、諸条件がおおむね整うことを前提に、帰還を目指す時期は15年春以降になると考える」。29日、避難先のいわき市で記者会見した松本町長は硬い表情で用意した文章を読み上げ、帰還時期に関する町長判断の内容を説明した。町内の除染やインフラ復旧が進んだことで「帰還に最低限必要な環境はおおむね整いつつある」と指摘。一方で第１原発の安全性への不信、住宅の傷みなどを理由とする町民の不安や心配も「重く受け止める」とした。プラス、マイナス双方の材料をともに重視した結果が、帰還時期を特定しない表現につながったようだ。しかし、来春を目標に帰還の準備を進めることは明言した。第１弾として、６月１日付で約20人体制の「帰町準備室」を設置。課長全員がメンバーとなる庁内横断型組織で、帰還の環境をさらに整えるための施策を推進する。具体的には(1)沢水や地下水を利用する水道水の安全確保(2)住宅内の清掃やネズミ・害虫の駆除による衛生環境の向上(3)共同店舗の整備による買い物環境の確保(4)やむなく帰還を見合わせる町民への支援――など。いずれも住民の関心が高い項目で、実現の度合いが帰還時期の最終判断に影響を与える可能性もある。除染の完了を踏まえ、避難指示区域内にある本来の町役場での業務も６月に一部再開する。ＪＲ東日本は同月中にも、役場最寄りの常磐線竜田駅と広野駅の間の運行再開を予定しており、いわき市内から町の中心部まで電車で行き来できるようになる。松本町長は帰還に向けた環境整備がある程度進んだ時点で再度、町民や議会の意見を聞き、帰還時期を最終決定する考えだ。一方、楢葉町が帰還の目標時期を示したことについて、同じ双葉郡の大熊町の渡辺利綱町長（双葉地方町村会長）は29日、「双葉郡全体にとって励みになることだと思う」と話した。第１原発に近い楢葉町の帰還が始まれば、郡の復興の大きな節目になる。今後、国には効果的な追加除染など、住民の不安解消につながるきめ細かい支援が求められそうだ。

≪　９月　宮城・福島　チェロキャラバン≫

１３日（土）「1000 人チェロ」仙台練習
14 日（日）石巻市内「石巻市民交響楽団」練習
１５日（月）仙台市名取「イオン」・閖上「朝市ロビー」演奏

≪９月　福島「合唱伴奏」大熊町・浪江町仮設住宅訪問≫

２０日（土）第 36 回「河東仮設住宅」
２１日（日）第３７回「扇町１号公園仮設」
　　第３８回「石神第１・２仮設住宅」

証言⑦―９月 20 日会津若松市《大熊町「扇町１号公園仮設住宅」の話》

（大熊町からの被災・避難者、自治会長以下 13 名、首都圏からの参加者 14 名）

１　３・１１直後から仮設入居

11 日の酷い地震には驚いたが、その後は片付けなどして過ごしていた。翌日になって、急に理由も告げられず、「緊急避難するように」と、町からの呼びかけで、茨城から来た 50 台近くのバスに分乗した。ともかく「西へ逃げろ」。すぐに帰れると思うから、クレジットカードや免許証なども置いてきて、着の身着のまま。運転手も、目的地がどこだか分からず、とりあえず田村市、三春町方面などの体育館などへ着くが、そこからは、参加者はそれぞれ 7～８箇所の福島県内や茨城、栃木、関東の親戚などを頼りに転々。７月前後になって、町からの案内で、現在の仮設住宅へ入居し、現在に至った。

２　会津の暮らし

この近辺は、大熊町の田園風景に似ていて違和感は一見無いが、「なんで俺たちは会津で磐梯山を毎日見なきゃならないんだ」という気持ち。たまにしか降らない浜通りから来たので、一晩で８０ｃｍも積もって、雪深いのには驚いた。最初の頃の仮設住宅は、冬仕様になっておらず、その都度、雪除けの玄関など要望しては追加工事で補強してもらってきた。そして、若い年代の夫婦や子供などが、仕事と教育の関係でどんどん外へ出て行き、当初からすれば、半減した。（2011 年８月 82 戸→2014 年３月 63 戸→現在 47 戸）たまに、自宅や墓参りに大熊町に入るが、ネズミやハクビシン、猫などに荒らされるだけでなく、米蔵を破られたので、警察に届けたら、現場の状況から「猪が突進して壁を突破し、食べていったようだ。」と言われた。

ここにいる農家の方々など、朝からの仕事ももう出来る見込みも無く、朝からやることもない。３・１１前の普通の日常が、現場で崩れてゆくのを見るにつけ、もうあの時、この場所に戻れない侘しさ。３．１１での直接死こそ少なかったが、その後の関連死と認定されただけで倍以上。心身とも辛い。

３　今後の見通し

もう（ここに暮らす人は）故郷には戻れない。福島県の用意する復興住宅に入るといっても、会津より郡山、いわきのほうへ移る希望者が多いので、せっかくこの仮設で知り合い、仲良くなった皆さんが、また離れ離れになるのも、また辛く、暗い気持でいる。

会津若松市」ー「八重の故郷」。人口１３万。戊辰戦争で数千人の死者を出し、多くの元会津藩士は青森県下北半島へ「流される」が、江戸時代「武士の中の武士」と言われた頑固ともいえる気風は、未だ健在。廃藩置県後も、５年間は「若松県」だったが、中通りや浜通りを含めた「福島県」になった現在も、「会津地方とそれ以外」意識は消えていない。会津若松市内にある仮設住宅は双葉町からの避難者の１棟以外は、大熊町からの避難者。また、借り上げ賃貸住宅２１５０人の６割が大熊町民。

「大熊町」－３・１１前、約１万人の大熊町は、元々は海岸線が切り立った崖で、そこを崩し、第１原発が作られたように、浜辺が少なく、結果、今回の３・１１での津波被害は、他の地域に比べれば、軽微である一方、原発から至近距離だったことから、全員退去し、現状では、約４割はいわき地区、２割は会津地区、１割は首都圏へ避難。
今回の爆発事故を起こした福島第１原発１号機～4 号機があるため、原発立地４町（5～6 号機の双葉町、第２原発の富岡町、楢葉町）の中でも最も放射性物資の汚染が大きい地域。従って、「帰宅困難区域」（作業員以外の住民の立ち入り・一時帰宅禁止　全体の 96%）と「居住制限区域」「避難指示準備解除区域」（日中の時間帯のみ、町からの許可を得ることを前提に立ち入り・一時帰宅できるが、宿泊不可　これらを合わせて全体の 4%）に再編されたまま。現在は、会津若松市内に臨時町役場が設置され、市内 12 か所の仮設住宅と借り上げ賃貸住宅 465 戸に 2200 人が半々で居住。

証言⑧―９月２１日本宮市《浪江町「石神第１仮設住宅」での話》

（浪江町からの被災・避難者、自治会長以下６名、首都圏からの参加者 14 名）

１　３・１１直後から仮設入居

11 日の地震は、これまでに経験したことがない、という町中、海寄りの人と、山奥で多少、子供の勉強机が倒れたぐらいで大したこともない、と感じた人がいた。その後、テレビを見ていたが、「仙台空港に津波が到来している」というのを最後に停電。まさか、この町の海岸線に津波が押し寄せているなどと想像もしなかった。また、海寄りにいた人は、請戸海岸上空の空の色が茶色くなってきたのでなんだろう、と思ったらそれが津波が家々を壊しながら国道 6 号線までも押し寄せてきたところだったんだ、と体験。翌 12 日早朝、菅首相が記者会見で「避難指示」発表したが、町には何の連絡もなく、ともかく「逃げろ」。取るものも取り合えず、普段なら車で 40 分程度の「津島」地区へマイカーや自衛隊の車で 4 時間かかって逃げたが、その自衛官や警官の格好が、防護服を着ていて、「こりゃ、おかしい」と感じた。そして避難先で高線量の放射性物質で被爆する、なんて思いもせず、数日を過ごした。そこから新潟や栃木など何箇所かの伝を転々とし、金も食べ物もその宿泊させてもらった先々で「恵んで」もらう羽目になった。その後、この仮設に夏に入居した。

２　本宮の暮らし

ここは、浪江に比べると、山の上にあることもあり、寒暖差が大きく、雪も深い。そして、ともかく（山の上の運動場施設にあることもあり）、やることが無い。男性は、テレビか、パチンコか酒飲むほか時間が潰せない。男性、とくに長男は、先祖伝来の土地で家屋敷も引継ぎ、「変化を求めない」気風なので、３・１１以降の急激な環境変化に対応できず、「やることが無い」。

３　今後の見通し

町では、まず比較的放射線量の低い「避難指示解除準備地域」でのコンパクトシティ構想を検討する、というが、インフラ整備程度で、実際はいつになったらという感じ。また、すでに帰還可能となった川内村や都路、広野などを見ても、実際に帰宅したのは、高齢者ばかりで、３割程度。若い世代は、仕事も、買い物も、教育も不安な新しい町に戻ってくるだろうか。

≪１１月　石巻市民交響楽団定期演奏会参加≫

２日（日）第 40 回記念定期演奏会

３日（月）宮城・福島被災地ツアー（奥松島・閖上・亘理・国道６号線）

証言⑨―11 月３日　宮城県亘理町《公民館での立ち話》

帰り道は、そのまま仙台空港を通り過ぎ、亘理へ。「３１１　有志」の原点、２０１１年７月から毎月、６回訪問、支援物資を６００人もの長蛇の列の被災者の方々に配布していた吉田公民館や体育館を見てみよう、と立ち寄る。同行の、いまや「戦友」の２人と知り合ったのも、ここからだ。すると、なんと体育館も公民館も使えるまでにリフォームされていた！そして、その入り口で出会った女性と立ち話。すると、「私も最近まで仮設暮らし。今、地区の祭りが終わって、借りた大鍋など返しに来たの。」「３・１１では、息子がこの公民館の裏で運転中津波に襲われ、泳いで公民館にたどり着いたら、中から引き上げてくれ、助かったところなの。」「以降、避難所や仮設暮らし。ずっと、現実とは思えず、夢の中にいるようで、呆然としてきたのが、ようやく地区の集まりも半分ぐらいの人が戻ってきて、笑顔で騒げるようになったの。嬉しかった。」。そして「今は地区の自主自治会副会長で、色々な地区の集まり、イベントの手配もしているの。できたら、皆さんの昭和歌謡や童謡も良いわね。」と。またつながりそう。開きっぱなしの踏み切り、草ぼうぼう、錆びた鉄路も、いつのことか、という、亘理駅から一駅だけ開通した浜吉田駅も見て、少し、復旧（復興ではとてもない）の明るい気分になれた。それと、現在、宮城県内の鉄路で、どこがまだ代行バスなのかも確認できた。

我々「３１１　有志」が２０１１年７月から１１月まで、半年間の支援物資配布支援活動を行った町。常磐線「浜吉田駅」近くの「吉田公民館」前の広場で、亘理・山元両方の被災者約 600 人に毎月支援物資を配布し続けていたので、馴染み深い。

●亘理町―宮城県南部の太平洋沿岸、阿武隈川の河口に位置する3.3万人の町。温暖な気候を利用しての果樹・花卉栽培が盛んであり、特にイチゴが名産である。生産高では第三次産業が主だが、土地利用面では農用地が47.5%を占める。イチゴの出荷量が東北地方第1位であり、またリンゴの出荷量も宮城県第1位である。工業は地場食品加工業と自動車関連企業が主である。郷土料理のはらこ飯は近年農山漁村の郷土料理百選に選出された。
3月11日、震度6弱を記録し、役場庁舎が使用不可能となる。さらに大津波により町の面積の47%が浸水し、荒浜・大畑浜・吉田浜・長瀞浜など沿岸の部落が壊滅的被害を受けた。この震災による町民の死者・行方不明者は計305人(町内で発見された遺体は257体)。また5,600棟を超える住宅が全半壊し、産業被害総額は3,353億円超にのぼった。

★2011年９月　亘理地区支援物資配布バザー「さざんか市」レポート★

各地で猛威を振るった台風の翌週で快晴に恵まれた。

早朝３時頃から、25人が、八王子、小平、横浜、朝霞、日立、東松山、仙台から車９台に分乗、さらに新幹線白石蔵王駅で４人を乗せ、亘理地区会場「吉田公民館」へ到着。午前３時から並び始めた、という長蛇の行列を、計測器カウント。開始１０時頃には４００名を超える。今月は、全国の支援の輪が急速に広まり、約１００名の方から送られた段ボールが、何と500個。受ける現地主催者は、「嬉しい悲鳴」だ。さらに車に積んできた物資も降ろし、会場造りに取り掛かる。前回、天候不良で余り出せなかった「秋冬」衣料品は、山のよう。我々は、お揃いのサッカーシャツに首からは、名前入スタッフカード。

開始。１０人づつ、順番にコーナーに誘導、混乱は無い。自前の大きなバックや、会場で配る大きなビニール袋を手に、「童謡」や「上を向いて歩こう」など、BGMが流れる中、ゆっくりと進んでゆく。「バンドネオン・ヴァイオリン・フルート・ベース・キーボード」演奏も、我々の有志だ。さて、被災者の方々は、仮設住宅や、自宅の２階暮らしなどまちまち。家族構成も異なりニーズも多様。そして仮設住宅は、狭い。保管スペースが足りず、「その日暮らし」にならざるをえない。町からの援助は、電化製品など、入居後２週間だけ。その後は、自立すべき、と援助もない。一方で、職場も無くなり、収入も厳しい。自宅に戻った方々も、行政からは見放されたまま。なので、支援のニーズは、減らないのだ。

「食料品」―大量に届いた飲料水、りんごは、「一人一個」充足。それ以外の缶詰、レトルト食品、お菓子、などは足りず、渡すものが無くなる。
「日用品」―ミヨシ石鹸の御好意の「石鹸・シャンプー」は、大量に配布。でも、なぜかボディーシャンプーが無くなる。さらに、数の少ない布団や毛布、そして紙オムツは、アッと言う間に無くなる。行列の被災者の方々が口々に、寝具が欲しい、と言う。靴も、ヒールの高いモノを除き、「売れ行き」が良い。
「台所用品」―これまで「売れゆき」の良かった食器、鍋・釜が余り始めた。
「衣料品」―秋冬ものの量は既にほぼ充足した。しかし、「おしゃれな都会の人と違い」、ゆったりしたズボン、や胴回りが大きい、L サイズが足りない。
「本」―こども向けの絵本などが多く、残ったが、子供連れで立ち止まるお母さんや、単行本を嬉しそうに抱えてゆくオジサンもいた。
後片付けも終え、午後２時より、毎回好評のドライブインで「昼食兼交流会」。隣で食事中だった被災者の数人も、飛び入り発言頂きながら、冬に向けて必要な支援物資の絞込みをした。やはり、食品、寝具などだ。午後３時すぎより、被災した海岸沿いの「亘理町荒浜地区」「山元町」を、時折下車しながら、体感。すっかりススキの草原となって、秋めいた風景の中、半年以上経過しても、寂しげにご遺体が発見された場所を示す**「ピンクのリボン」**が、いまだ荒野と化した市街地のあちらこちらで揺れる。涙ぐむ参加者。白石インターは、５時半。思えば、午前２時起床し、午前様の帰宅。風呂などで午前２時就寝。若い頃、期末試験の一夜漬けでも、「カンテツ」（完全徹夜）出来なかったのに、不思議と睡魔に襲われない「奇跡の日」だった。（齋藤記）

≪１１月福島「合唱伴奏」飯館村・南相馬仮設住宅訪問≫

２９日（土）第３９回「相馬第６仮設住宅」
第４０回「南相馬市サポートセンター「希望」
第４１回「千倉仮設住宅」
３０日（日）第４２回「森合町仮設住宅」
第４３回「松川仮設第１住宅」

証言⑩―11 月 29 日相馬市《飯館村「相馬第６仮設」での立ち話》

午前１０時半～１２時まで、合唱、クイズ、軽体操、そしてタンゴ演奏など。爆笑相次ぐ。最後に、歌謡「ふるさと浪江」の作詞者根本さんが挨拶。「ふるさと小高」も作った、という。

表で、同世代の女性と立ち話。「自分は、酪農農家でした。３・１１以降、１ヶ月は被爆も知らず、とんでもないほど汚染された水でご飯を炊き、味噌汁飲んでいました。またいざ退避と言われても、繁殖用の牛２２頭、子牛１５頭を避難できず、で、餌をやりに帰っていました。結局、本宮の畜産市場で全頭売ったので、鎖につないだまま、餓死、だけは避けられました。今は、酪農再開は絶望。３世代で暮らしていたので、今、家を相馬市内に建てて、早くこの仮設暮らしからは抜け出そう、と思っています。いいこと、と言ったら、ここは、飯館村より４度暖かい。時折、浜風で寒いときはあるが、山の中の寒さに比べ、楽ですね。本当に飯館は寒いところでした。」すると、この話をジッと聞いていた男性、「私は息子です。３８歳になりました。今は、両親と仮設で３人暮らしですが、狭くて、息が詰まるので、早く新築する家の自分の部屋が欲しいです。（怒り口調で）それにしても、選挙なんかしている場合か、です。少子化、地方活性化など、絵にかいた餅です。酷いです。私の姉２人は、すでに３・１１以前に嫁ぎ、私も、長男として、酪農の跡継ぎになることで、嫁さんももらうつもりでした。しかし、もう酪農は絶望です。近く、南相馬の介護事業所を受験、面接があります。受かれば、無職からは脱することはできます。でも、収入は限られ、とても家族を養うことなどできません。誰が、私のような人間に、嫁入りしてくれますか？本当に原発、東電は憎いです。」

●**飯館村**―1998 年町域にある花塚山・野手上山・虎捕山の３山が「うつくしま百名山」（福島テレビ主催）に選定。2010 年（平成 22 年）９月 27 日：「日本で最も美しい村」連合に加盟。2011 年１月１日：総人口 6,152 人、世帯数 1,715 戸。東日本大震災が発生。飯舘村は当初、高線量の放射線で被爆も知らされず、約 1 ヶ月、南相馬市や浪江町からの避難者受け入れで忙殺。その全域が、放射線量が年間積算 20 ミリシーベルトに達するおそれの「計画的避難区域」（1 カ月以内を目安として住民全員の避難が指示される区域。より深刻な「警戒区域」の外側）に指定され、土壌からは放射性物質の検出が続いている。

証言⑪―11 月 30 日松川町《飯館村「松川仮設第１住宅」での話》

１時半開始。ここでは、笑いだしたら、止まらない人も居て、大好評。ここを管理している、という NPO の女性も飯館村出身で、別な仮設からの通い。聞くと、

「私は、養鶏農家でした。３・１１以後、ほかの人同様、一ヶ月間、普段どおりの生活をしていましたが、急に全村民避難、と言われ、１万羽の鶏の対応に困りました。そこで、いったん、避難した中通りから毎日通って餌やりや卵の対応をしていましたが、たまたま飯野村で引き取ってくれる先が見つかり、トラックに１万羽を何回も往復して移し、餓死だけは避けられました。でも、もう、養鶏は再開できないので、このような仕事でなんとか日々暮らしています。将来が見えない不安は誰も一緒です。」正直、先の市場で売られた牛やこの鶏も、大量の外部、内部被爆をしていた。さて、それらの牛や鶏はどうなったのだろう…、と疑問が膨らんだが、当事者に尋ねる勇気はなかった。

2011 年 11 月 27 日　福島県飯館村前田区、長谷川区長さんのスピーチ

（某ブログより）

今日、ベルリンにて、ブント（ドイツ自然・環境連盟）、ドイツ放射線防護協会、ベルリン日独平和フォーラムという三つの団体が共同で「福島県の人びとによる報告」と題する講演会を行った。参加者は 120 人ほど。日本人もたくさん来ていた。非常に濃い内容だったので、そのすべてをここに記したいところだが、ひとまずは講演者の一人、福島県飯館村前田区区長である長谷川健一氏のスピーチ内容を紹介したい。大変印象深く心を打つスピーチであった。Ｐ２２

「私は、福島第一原発事故のヒバクシャです。私の住む飯館村にプルトニウムが降ったのです。放射能は目に見えませんが、もし見えるならば、私の体は今、ドイツの街を輝かせるクリスマスの飾りのように光っていることでしょう。事故が起こってすぐ、私は原発がおかしい、何かが起こっているのではと強く思いました。そして、新聞に三号機の爆発が発表された３月 14 日、私は慌てて村役場に飛んで行きました。「原発はどうなっているのですか」と問いただすと、「大変なことが起きている。空間放射線量が 40 マイクロシーベルトを超えている」という説明を受けました。驚いた私が部屋を出ようとすると、役場の人はこう言うのです。「誰にも言わないでくれ。村長に口止めされているんだ」

しかし、私はすぐさま部落に帰り、言うなと口止めされたことなど気にせずに部落の人に危険を知らせました。翌朝、3月 15 日の朝、６時半に地区の人が続々と集まって来ました。そのとき、外は雨が降っていて、そのうち雪に変わりました。後でわかったことですが、ちょうどその頃、飯館村の放射線量は 100 マイクロシーベルトを超えていたのです。それを知らせてくれたのはジャーナリストの方です。大勢のジャーナリストが村に来ていたのです。私は、地区の住民に言いました。「外にはなるべく出るな。どうしても出なければならないのなら、マスクをしろ。肌を出すな。外から帰ったら玄関で服を脱ぎ、風呂に入るかシャワーを浴びるかしろ。畑の野菜を食べてはいけない。換気扇を回すな」と。そのとき、北西の風が吹いていました。飯館村は原発からの放射能の風をまともに受けてしまったのです。

私は、ジャーナリストをかき集め、訴えました。「飯館村を避難対象にしてくれ。どうか、それを報道してくれ」。しかし、それはかないませんでした。避難を希望する者がいるなら避難してもよいが、村は避難対象にならないと言われたのです。ですから、一部の人しか避難しませんでした。これは公式に発表された村の放射線量です。3月 15 日の午前６時２０分のところを見て下さい。44.7 マイクロシーベルト／時と書いてあります。ジャーナリストから知らせてもらった数値は 100 マイクロシーベルト以上です。なんという違いでしょう。公の発表は正しい数値ではないのです。嘘の報道をしているのです。

そして、国や県から、専門家達が次々に村にやって来ました。みんな口々に、大丈夫だ、安心しろと言います。しかし、その少し後に、今度は別の大学の先生のチームがやって来て、村中の放射線量を測りました。先生は「おそろしい。こんなところに住んでいてはいけない。私達が集めたこのデータを村長のところへ持って行ってください。避難しなければなりません」と言いました。しかし、村長は「このデータは公表しないでくれ！」と叫んだのです。村長は村を守ろうとしました。村をゴーストタウンにしたくなかったのです

そのまま二ヶ月半もの時間が経過しました。避難せずに住み続け、子ども達を被曝させてしまいました。その後、村は計画避難区域に指定されましたが、その前日の４月 10 日には国の方から偉い学者がやって来て、安全だと言っていたのです。それなのに、翌日の 11 日になると、「危険だ！避難しろ」と突然言われ、村民は怒りました。

私は酪農家です。この写真は私が事故後に牛乳を捨てているところです。毎日、牛乳を捨てました。村が避難の対象となったとき、牛は連れて行ってはいけないと言われました。私達は泣く泣く酪農を諦めることになりました。この酪農家の奥さんは、牛が乗ったトラックを「ごめんね。ごめんね」と言いながら追いかけました。そしてこの若者は、東京生まれで、どうしても酪農がやりたくて村へ移住して来た人です。飯館で 10 年間酪農をやって、ようやく軌道に乗ったとき、それを諦めなければならなくなりました。彼はそれが悲しくて泣いているのです。飯館村では、村人がみんなで力を合わせ、良い村作りに励んで来ました。日本一美しい村に推薦され、認められた村です。その村が放射能に汚染されました。

そして、ある日、私がもっとも恐れていたことが起こりました。相馬市の同じ酪農家の友人が自殺したのです。この写真に写っているのは友人が亡くなる前に壁に書き残した言葉です。「原発さえなければ」と書いてあります。「2011 年6月 10 日　１時３０分　大変お世話になりました。私の限度を超えました。ごめんなさい。原発さえなければと思います。残った酪農家は原発に負けずに頑張って下さい。仕事をする気力を無くしました」。時期を同じくして、隣の地区の 102 歳のおじいちゃんも自殺しました。南相馬市の９３歳のおばあちゃんも「墓へ避難します」と書き残して自殺しました。こういうことが次々に起きたのです。これからも起こるでしょう

これは7月下旬の私の自宅の雨どいの線量です。27，62 マイクロシーベルト／時と出ています。現在、村民はみな避難していますが、我々は２４時間体制でパトロールしています。雑草が伸びきって、温室の屋根を突き抜けています。これが今の飯館村の姿です

私は、国が原子力を推進して来たのだから、国は事故の対策をきちんと取ることができるのだろうと思っていました。ところが、事故が起こって、今頃、どうやって除染をしたらよいかの実験をやっているのです。私達村民は、村に戻れるのかどうかもわからない状態です。でもただ一つ、はっきり言えることは、私は子どもや孫を飯館村へは絶対に返さないということです。

飯館村の面積の 70%は山です。家の周りや農地をいくら除染しても、山の除染はできませんから、山から放射能が移動して来るのです。我々は今から何年か後に、村を捨てる決断をしなければならないかもしれません。可哀想なのは子ども達です。子ども達は飯館村というステッカーを一生背負って生きて行かなければなりません。広島や長崎の被爆者とおなじように、差別を受けることになるでしょう。そんな差別の起きない社会を私達はなんとしてでも作っていかなければなりません

今回このようにしてドイツを周り、私はドイツは素晴らしい国だと思いました。なぜなら、福島の原発事故の危険をきちんと見極め、ドイツは脱原発を決めたからです。それにひきかえ日本という国は、こんな事故が起こってもなおかつ、原発を再稼働するという。それどころか、原発を輸出しようとすらしているのです。そんなことは絶対に阻止しなければなりません。これからは、日本人も声を大きくし、戦っていかなければならないのだと思います

≪参考≫第 38 回全国公害被害者総行動デー　［東京電力・政府合同交渉］

２０１３年6月6日

私は主に双葉郡の２０ｋｍ圏内の避難指示区域福島原発被害者訴訟原告団事務局長の金井なおこと申します。私は今日、避難指示区域の損害賠償金のお話をするんですが、たまたま、今ですね、同じ原告団に所属しております双葉町の方から、ちょうどメールが入ってきていますので、それをまず最初に読みあげさせていただきます。で、双葉町はご存じの通り９６％がもう帰宅困難区域ですので、自分の家に戻りたくても住みたくても、もう住めない、帰れないという地域です。それを踏まえて、あと今から読みあげますメールの内容は、どうぞ皆様方がご自分のお家を想像しながら聞いて下さい。では読みます。

双葉町一時帰宅者のメール

金井さん、私たちは先月２９日（２０１３年５月）に一時帰宅しました。
古い家なので、前回の３月にも増して、家の中はネズミの糞がそこいら中にあり、
糞の大きさも前回の２倍ぐらいに大きくなっていました。そのうえ死骸まであったので、悪臭がひどくて最悪でした。先に双葉町に来た人から、ネズミの大量発生で、家の中に蛇がとぐろを巻いていたと聞いていたので、怖くて気が進まなかったんですが、まだうちには蛇はいなかったです。ゴミ袋にまとめておいた食べ物類なんかを全部食い散らかされ、
悲惨な状況で、家の中はボロボロ。ホッカイロまでかじって中身が出してありました。
家の柱まで齧ってましたよ。片付けていたら汗だくになって、あっという間に時間が過ぎてしまいました。もう住まないと思っていても我が家です。
行けばネズミの死骸を始末しない訳にもいかないし、このままではどうしようもありません。でも片付けたものも庭に捨てて置くしかないし。そして帰りのスクリーニング会場で「ネズミを駆除してもらわないと困る」って東電社員に言ったら、「帰宅困難区域には入れませんので、ネズミの死骸を持ってこられても困ります」ってヘラヘラして答えるんで頭にきました。うちの人が「俺だってネズミの死骸を持って来たかったよ！」って怒鳴ってしまいましたが、所詮東電には他人事でしかないんですね。いつもの事だけど、帰りは１０人ぐらい２列に並んで、ただ見送りに頭を下げるだけで立っていたから余計に腹が立ちました。道路工事や復旧作業の作業員は帰宅困難区域だってちゃんと仕事に入っているのに、なんで入れないんですかね？
自分の家に帰っただけなのに、スンゴク疲れてしまいました。
近くの家では庭に大量の牛の糞があったという話もあります。牛に罪はありませんが、どうにかしてもらわないと本当に困ります。後日ネズミの駆除の件をもう一度東電に聞いたら、**「役場に電話しろ」**とのことです。

帰宅困難区域は５月から申請すれば月に一回年１０回一時帰宅できるようになったんですが、もう、正直持ち出せるものも無いし、とりあえず家があるので様子を見に行くしかないのですが、今更どうしろというんでしょう？悲しみが増すばかりです。
金井さん、東京は暑いですか？お気を付けて。私たちのこの悲惨な現状を是非訴えてきてください。というメールでした。続いて私の方も避難指示区域の損害賠償金の話を少しさせて下さい。
避難指示区域―楢葉町―の損害賠償金
平成２３年の９月ですね。疲労困憊（ひろうこんぱい）の、…本当に私たちはくたびれているんです。私たちに向けていよいよ東京電力が最初の損害賠償金の本払い請求書を送りつけてきました。これは同じく４月に、同年（平成２３年）４月。
避難住民に「仮払い」と称して東電が振り込んだお金を清算します。との内容でした。
この請求書を最初に見た時、どうしようもない怒りと、複雑極まりない書類内容の多さに驚き落胆しました。避難している住民の中には、高齢者や障害者の方々も沢山います。
東京電力はあまりにも事務的なマニュアル通りの冷酷な請求用紙を送りつけてきました。
これをすべて理解したうえで、「正当な賠償金を受け取ることは、当然不可能です。
事実、事務手続きの手順をしっかりと理解できている筈の私でさえもつい先日自宅の財物賠償金、宅地と建物ですが、合わせた合計金額が楢葉町は避難指示解除準備区域という位置づけであるがために、６分の２。つまり、新築での時価相当額の３分の１の金額を認知された請求書類が東電から返送された時、私は本当にショックでした。実際楢葉町はまだ宿泊も禁止なんです。ですからまだ避難指示の最中で、私も借り上げ住宅を借りて避難しているにもかかわらず、そのような回答でした。「あなたのところはとりあえず２年分払いますからこれで同意をしてね」と。もちろん私は同意などできません。それ以前に精神的慰謝料も一人１０万円。財物の家財は各世帯一律と家族人数分。それも金額は東電がすでに印字した請求書を送りつけてきます。
また避難により持ち出せなかった自家用車などは、また別の請求書類を自分で請求しなければなりません。私たちはただお金が欲しくて行動して請求しているのではありません。
今までの賠償金でさえ、実際受け取った人は、生活費として消えているのが実状なんです。
みなさん住宅ローンや車のローン、子どもの進学による教育資金の貸付金による返済など、
失業や減収した人が、それでも何とか生活を維持するためには、賠償金＝私たちにとってはもう生活費なんです。世間では私たち避難生活者があたかも大きな賠償金額を東電から受け取って勤労意欲も無くし怠けているなどと思われている風潮が一部独り歩きしているようですが、私たちは自宅から強制的に避難させられ、ふるさとを奪われ、生活の基盤そのものを奪われたのです。それに見合う生活再建するための賠償は当然要求します。この前代未聞の大災害を起こした東京電力と国の負った責任は、あまりにも大きく、このまま絶対に見過ごすことはできません。そしてもし本当に誠意のある対応をするというのであれば、今日、東京電力、さらに国の真意をここにお聞かせ願いたいです。

《１年間の「反省会」》

11 月 30 日（日）松川仮設第１住宅にて

終わって、一年間を振り返っての「総括会議」。選曲の課題や運営上の問題点の指摘や論議もあったが、結論は、全員一致で、来年も支援活動を継続することに。
「支援活動は絶対必要。宮城県、福島県の被災・避難者には、大きくは放射能問題の有無で大きな差はあるが、どちらも、故郷のコミュニティを失い、将来も見通せず、立ちつくす多くの方々がおられ、あれだけ笑い、感謝を頂いている以上、ともかく、来年もやる」。
仮設などの訪問は、来年４月から。その前に、「和光３・１１を忘れない」イベントでの「小ホール」３０分出演と、夜のコンサート演奏参加。その前後に２０１５年第４回支援者会議開催が決定。お疲れ！来年も良い年でありますように、と仮設前で別れる。
大宮駅で３人を降ろし、帰宅。充実し、また成果のあった２日間だった。

《番外編》

【原発被害―放射線量測定】

５月２４（土）25 日（日）飯館村・中通り・和光市

今回のツアーで、初めて、「放射線量計」持参し、各地で計測。
最大値は、やはり、飯館村近くの山道で、２．５～３．５μSv／h。桁が違う。（走行中で、写真は、１．０１しか撮れていない）。同行車にも、窓は閉め切り、エアコンも消すように指示。しかし、村の中では、一桁下がる。そして、暫くして、川俣村に入ると、首都圏と変わらぬ０．１０前後にまで激減。次に高かったのは、意外にも、郡山市内の、私が１０数年前勤務していたビルの前の信号待ちで、１．１５μSv／h。次に、３５年前に勤務していたビルの前の信号待ちで、０．６７。一方、二本松市、相馬市の仮設敷地や、福島駅前から白河市内までは、首都圏と余り変わらぬ０．１～０．２３程度。原町区小浜地区の２０km 圏内の津波被災した庭や家の床。０．４３だったが、その周辺の道路では、０．１８程度。

そして、福島や埼玉の高速道路の PA。SA はどこでも、また郡山駅前などでは、概ね０．３５～０．５０μSv／h。前後と高い。そこで毎日働き、また食事しながら、談笑している大勢の幼児、子供連れが気になる。外環を降り、和光市内の暗い一般道路に出て、信号待ちから暫くは０．３５～０．３７μSv／hあったのには、びっくり。でも、和光市内から朝霞市内に入ると、Lo～０．１０。ちなみに３．１１前の許容基準値、年間１ミリシーベルトは、０．２３まで。

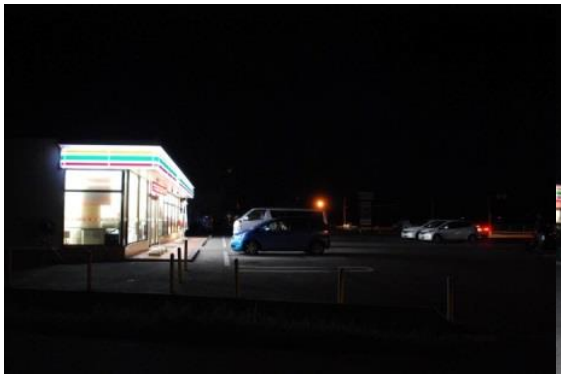
②9月１５日（月）国道６号線開通当日通過

岩手の３箇所で演奏してきた約２０人のチェリストと合流。１１時から「閖上」、１時すぎから「名取」、３時から「山元町」で、「チェロアンサンブル＆合唱」イベント。各地で、来年５月２４日「１０００人チェロ」の紹介。解散時には、参加者へ「和光３・１１」参加のお願い。そして、ひとり、本日開通したばまりの国道６号を通り、第１、第２原発前を通過。気休めだが、線量が１５以上というので、マスクし、窓を締め切り、エアコンかけず、の一時間、真っ暗闇。そして広野から常磐道で夜１０時帰宅。

（セブン・イレブンだけが「灯台」。ポツンと灯り）

相馬市小高区のセブン第１原発からほぼ２０ｋｍ北側。すぐ先が 2012 年３月までは「２０ｋｍ圏内」で強制避難地域だったところ。なので、周辺は、人家も街道沿いも人はいない。真っ暗。しかし、店内では、いかにも作業員の子連れ家族が二組など結構、混雑。その先、９月までや立ち入り禁止だった浪江町も通過、一時間、国道６号線第１、第２原発の前を通過。当たり前だが、真っ暗の中の不安な一時間。途中の市街地は、道路沿いに長いバリケード。わき道の入り口もも、またバリケード。ようやく、遠くに灯り。

最初の灯りも楢葉町のセブン。やはり周囲の店は真っ暗。店内には、やはり、原発作業員たちが数人。２４時間営業。原発作業員中心の利用。下がったとはいえ、風向きによっては、まだまだ高線量地区。ここで働く人が心配だ。



（南相馬市小高区のセブン）

（楢葉町のセブン）

③11 月３日（月・休）　国道６号通過ー南下ー

亘理から、山元町、そして福島県。一路、国道６号線を南下。石巻から始まり、相馬市までは、放射線量は、首都圏並みの「０．１１」前後。それが、南相馬市小高区、浪江町に入ると、「０．２４」前後へ。一応年間換算で、限度ーミリシーベルトぎりぎり。それが、双葉町、そして大熊町に入り、「第一原発ゲート前」で、急激にアップし続け、なんと３．３３μSv／h（写真では３．３１」！そして、富岡町、楢葉町、広野町へ通り抜けると、「２・５０」（写真は「２．４７」）「１．５０」「０．８０」第２原発ゲート前で「０．４４」、「０．３０」「０．１１」などと下がってゆく。が、広野サービスエリアの山側へ登っていくと、ＳＡ入口で、手持ち線量計では「０．２４」だが、道路公団の表示は？。帰宅は午後９時半。風邪、一向に改善せず。

④１１月２９日（土）国道６号線ー北上ー

早朝５時出発。京浜東北線南浦和駅で、「北大宮駅」「磯子駅」から来た２人を乗せ、さらに東武スカイツリー線「新田」駅で、「鐘ヶ淵駅」から来た１人を拾い、常磐道ひた走り。富岡 IC で降り、国道６号線を北上。助手席の同乗者の測定では、第１原発あたりで放射線量「４．67μSv／時間、年間換算値では 50mSv」の「異常値＊」。

＊「異常値」－３．１１前の福島第１原発での作業基準も、年間１μSv／h 以上の区域立ち入りには、防護服着用だった。それが、３．１１以降、「現実対応」で、年間２０μSv／h までは居住制限しない。チェルノブイリの基準は、現在も、年間１～５μSv／h で「移住の権利を保有」。それ以上は「強制退去地域」。ともかく、「元々自然界にもある。レントゲンや飛行機でも被爆はする。」という「怖くない」論があるが、特に一時的な外部被爆より、長期的な低線量被爆や食物や水など口から入る内部被爆が問題。３．１１当時の放出された放射線量はチェルノブイリの五分の一程度というが、３年経過して、終息どころか、相変わらず、水で冷やし続け、すでにチェルノブイリ規模になった、という。「科学的因果関係」が証明されないから、「安全・安心」というのは、「チェルノブイリの子供たちの甲状腺被害」や動植物の現状を見ると良い。広野町～富岡町までの沿線は、念のため車のエアコンを切り全員マスク着用で走行。かつて、飯館村開通の際も同じ対応だったが、怖さが見えないので、いつの間にか、「慣れ」てしまう。確かに、１時間以上、浴び続ける量ではない。しかし、上記線量は車内での締め切った中での測定値なので、車外はどれだけになるのか？2011 年当時測定した知り合いは、３０とか５０を検知した。車の外で測った知り合いは、１０を超えた、とも言う。今も汚染が続いている。

福島第２・１号機、核燃料の管理一元化　移送作業を公開

２０１４年6月5日　河北新報

双眼鏡で確認しながら炉心に残された核燃料を取り出す作業員

　東京電力は４日、福島第２原発（福島県富岡、楢葉町）１号機の原子炉から核燃料を取り出す作業を報道機関に公開した。作業は燃料を使用済み核燃料プールに一元化し、管理を簡素化するのが狙い。本年度末に３号機の取り出しに着手し、全４基の燃料取り出しを終える。作業は２日に始まった。作業員が燃料取替機を操作し、水深１６メートルの炉心に残された７６４体の燃料を１体ずつ目視で確認しながらつり上げ、隣の燃料プールに移した。今月末に移し終える予定。現場の放射線量は毎時２マイクロシーベルト。福島第１原発のように全面マスクは要らず、作業環境は震災前とほぼ変わらないという。
第２原発は東日本大震災の津波で原子炉冷却機能を一時失った。外部電源が１系統残っていたため、被災５日目に全基で冷温停止を達成した。設楽親所長は「（県や地元自治体から）廃炉を求められているが、燃料があるのも事実。安定的に冷温停止を維持していきたい」と話した。

福島第二原発の奇跡「報道ステーションSunday」より

2014年05月31日　THE HUFFINGTON POST IN ASSOCIATION WITH The Asahi Shimbun

２０１１年3月１２日。東日本大震災による巨大津波の影響で、福島第一原発の一号機が水素爆発を起こしたちょうどその時。実は第一原発から直線距離にして、わずか１２キロしか離れていない福島第二原発も、第一原発と同様の危機に直面していました。ひとつ間違えば、２つの原発が同時に爆発する可能性があった最悪の事態。福島第二原発ではどのように未曽有の危機を回避したのでしょうか。当時の第二原発所長、増田尚宏氏がその驚くべき状況について語りました。

写真提供：報道ステーションSunday

前日の３月１１日。地震発生の際、福島第二原発では４つの原子炉が通常運転されていました。大きな揺れを検知したとき、すべての原子炉は自動停止しています。増田所長が緊急対策室に入ったのは、地震から１５分がたったころでした。
「その時は、確か３メートルという予報だったと思うのですが、みんなに『津波がくるから気をつけろ』と指示をした記憶があります」しかし、現実に原発を襲った津波の高さは推定９メートル。そのまま津波は敷地を駆け上がり、最高１８メートルもの高さに達しました。それまで福島第二原発では津波に襲われても、建屋内は浸水しないという想定でした。「実際には、津波というのは瓦礫を運んでくるんですよね。その瓦礫が（建屋内）の扉に当たって扉が変形すると。それによって中に水が入ってきた。そんなことは考えていなかった」
津波が襲った瞬間、すでに想定外の事態は起きていたのです。津波が海辺に沿って並んだ、炉心を冷却する機能をもつ建屋内に侵入していました。
「２メートル５０センチくらいの水が入って、完全にポンプモーターは水に浸かった状況でした。ここのポンプが壊れると原子炉が冷やせなくなると。このままいくと、格納容器の設計圧力に達する可能性があるなと思いました。復旧するには１日も余裕がないかな、というくらいの上がり方でした」この時点で、福島第一原発と同様に、第二原発もメルトダウンの危機に瀕していたのです。４つある原子炉のうち、中でも１号機の原子炉建屋は地下に置かれた非常用ディーゼル発電機まで浸水し、３台すべて使えない状態。冷やす機能がまったくなくなってしまったのでした。
翌３月１２日早朝。１号機の圧力抑制室の水温は１００度を突破しました。ちょうどこの時間、菅直人首相が第一原発の視察に訪れています。当時、官房副長官だった福山哲郎氏のノートには、『第二、根源的な問題。海の水を循環しない』と記してあります。視察中の菅首相からの言葉でした。第二原発も非常に厳しい状況だと把握した政府は第二原発の半径３キロ圏内の住民に避難指示、１０キロ圏内の住民に屋内退避の指示を出します。１号機の圧力を下げるため、最後の手段である「ベント」を行う可能性があったからです。「ベント」によって格納容器の圧力は下がりますが、それは放射性物質が外に飛び散るという最悪の状況を引き起こすことでもありました。
１２日午後、第一原発で水素爆発が起きたとき、増田所長は緊急対策室にいました。
「なんとなく振動がきた気がしました。後を振り向いたらテレビで爆発のシーンが見えて。なぜ爆発したのか、理解できなかった」
第一原発と同様、メルトダウン、水素爆発の危機に直面していた第二原発で、増田所長は第一原発の状況とは異なるわずかな希望を見出しました。被災した外部電源４回線のうち１回線だけ生き残っていたのです。しかし、問題はこの１回線が炉心を冷却する建屋から遠すぎる場所にあり、建屋に繋がれていなかったことです。
増田所長は危機管理マニュアルにない「想定外の行動」に踏み切りました。なんと８００メートルも離れた外部電源の１回線を、建屋まで人海戦術でケーブルを担ぎながら運ぶという指示です。ケーブルといっても、何トンもする大変重いもの。通常なら機械を使っても１カ月かかる作業を、わずか１日で成し遂げなければならないという過酷なものでした。第二原発では２００人もの作業員が２メートル間隔でケーブルを担ぎ、建屋に引っ張る作業を開始したのです。Ｐ３２（完）